

1-10 現代に伝わる製品と参考図 (E) ―男性用装身具

大正から昭和初期には、スーツスタイルが日本の男性に急速に広まった。

その当時の紳士(ジェントルマン)と呼ばれる男性は、現在よりずつとおしゃれで、金銀の鎖のついた外国製の懐中時計やネクタイ・ピン、カフスボタンなどで身を整えることを男のたしなみとした。

「キザ」と言われて社会の反発を受けないように、ただ見せびらかすだけの装飾指輪は発達しなかったが、仕事上必要な印章(印鑑)に代わる印台(印面指輪)を指につけるものは多かった。

ここで紹介する懐中時計や時計鎖、時計提げ物、印台(印面指輪)、ネクタイ・ピン、カフスボタンが著しく発達するのは好景気に沸いた大正前期から。その流行は大正後期、昭和初期と続いた。

懐中時計

懐中時計を日本人が持つようになったのは、明治五年(1872)に開化政策の一環として太陽暦が採用されてから。とはいっても、輸入品なので高価であり、すべての男性が持てるものではなかった。事情は大正時代になってもさほど変わらない。特に金、銀側の懐中時計は簡単に入手できるものではなく、多くの男性が憧れた。さらにその上のプラチナ側の懐中時計を**求める男性もいた**。

貴金属の懐中時計は社会的成功(出世)のシンボルでもあったのである(貴金属側が買えない人はニッケル側の懐中時計で我慢した)。輸入懐中時計には種々あるが、なかでも一流店が扱っていたアメリカ製のウォルサムやエルジンは人気だった。

図 1-10-1 は尚美堂カタログからの金側とプラチナ側懐中時計。

図 1-10-2 は大正末期のものだがエルジン社製の懐中時計。



図 1-10-1
 金側、プラチナ側の懐中時計
 大正 2 年 1 月『尚美堂新品録』
 金側は英国紳士向き、プラチ
 ナ側は貴頭紳士向きとある。
 貴頭紳士とは身分が高く名声
 のある人のこと。



図 1-10-2
 エルジン社製懐中時計
 1926 年製
 側はホワイトゴールド張り

懐中時計鎖

懐中時計には紛失や落下を防ぐための時計鎖がつきもの。鎖には金、銀、プラチナ、その他の金属とあった。鎖は目立つのでセンスの見せどころでもあった。

懐中時計鎖はこれまで鎖の先の**引輪（金具）**や**T字金具**をベストのボタンホールに引つ掛けるのが一般的だったが、この時代にはチヨッキの左ポケットから右ポケットへ金鎖を橋渡しするような用い方がされた。和装の場合は帯（角帯や兵児帯）^{かへおび}に鎖をからませ時計は懐中に納めた（『博多大正世相史』⁷²）。

図 1-10-3 は大正期の懐中時計鎖着用図。

時計提げ物
懐中時計鎖には、いっしょに小さな提げ物を飾りとして付けることが多かった。



図 1-10-5
懐中時計鎖
金に銀交り

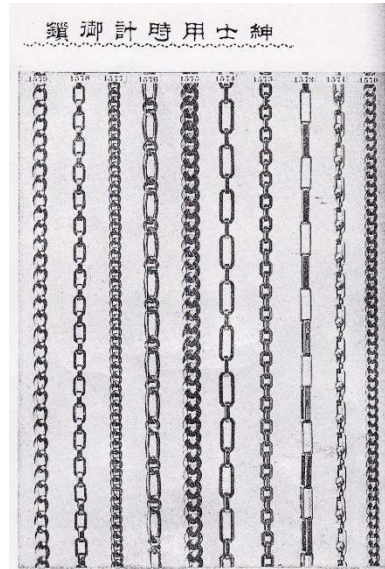


図 1-10-4
各種の懐中時計鎖
K18 とプラチナ
大正 2 年 1 月『尚美堂新品録』
より

5
図 1-10-4 はカタログからの時計鎖のバラエティー。
図 1-10-5 は類似のデザインの実物。



図 1-10-3
皇太子裕仁殿下（後の昭和天皇）の懐中時計鎖着用図
ベストの下方に時計鎖が見える。
大正 13 年 5 月『アサヒグラフ』より



図 1-10-8
金側懐中時計提げ物 (方針)
富士と松図
蓋を開けると中に方針
(天賞堂・伊藤廣司氏旧蔵品)



図 1-10-7
金側懐中時計提げ物 (方針)
(天賞堂・伊藤廣司氏旧蔵品)



図 1-10-6
懐中時計提げ物一覧
すべてK18
大正2年頃『みつこしタイム
ス (臨時増刊)』

その提げ物の種類とは、方位磁石 (方針と^{ほうばり}呼ばれた) の他、写真
入れ (ロケット)、記念メダル、彫金メダルなどさまざま。「鉛筆提
げ物」とか「繰り出し鉛筆」と呼ばれた芯が引出し式の小型シャ
ープペンシル (和製英語) もよく付けられた。
図 1-10-6 は三越カタログからの時計提げ物一覧図。図 1-10-
7 から図 1-10-12 はそれと類似の実物。



図 1-10-12
金のシャープペンシル（鉛筆
提げ物）
（天賞堂・伊藤廣司氏旧蔵品）



図 1-10-11
彫金純金メダル
風景図
池田商店



図 1-10-10
金（K18）記念メダル
ヴェルサイユ講和会議調印記
念
大正八年六月二十八日
造幣局製
（天賞堂・伊藤廣司氏旧蔵品）



図 1-10-9
金側懐中時計提げ物（方針）
ひさご図
蓋を開けると中に方針
（天賞堂・伊藤廣司氏旧蔵品）

印台（印面指輪）

印台（印面指輪）が初めて用いられたのは明治二十年代中頃で、その当時書かれた尾崎紅葉の『二人女房』にも「実印を彫りたる黄金きんの指輪」として登場している。

印台が盛んに用いられるようになったのは大正頃からで、印章を携帯する代わりに日頃指につけている印台の方が何かと便利ということ、商業に従事する男性などに愛用された。

金の印台が特に盛んになるのは第一次世界大戦後の好況時である。これを買ったのは主に戦後出現した、にわか成金と言われた人たち。いざという時には換金しやすいため、一時は大流行した。その後も印台は使われ続けたが、印台と言えど――特に金の印台は――成金を持つものというイメージが強くなりすぎたためか、一般にあまり好印象はもたれなかった。

図1-10-13は尚美堂カタログからの印台のさまざまなデザイン。図1-10-14は印面彫りのサンプル図。

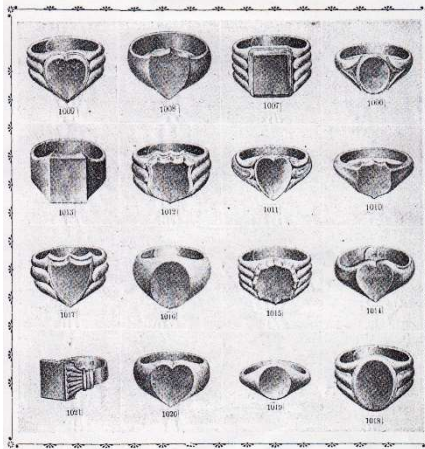


図1-10-13

純金とプラチナの印台指輪

大正2年1月『尚美堂新品録』

より

今や装飾品と称するよりは純然たる実用品であると説明している。なかには、おしゃれなデザインもあった。

カフスポタンはカフ・リンクスの和製英語。ワイシャツの袖口を



図 1-10-15

ネクタイ・ピン着用図（後藤新平）

ネクタイの結び目の下に金製らしきピンのヘッドが光る。胸下の方に、かすかに時計鎖がのぞく。

『近世名士写真 其1』

（国立国会図書館所蔵）

それを防ぐ目的もネクタイ・ピンにはあった。

図 1-10-15 はネクタイ・ピンの着用図。着用しているのは、東京市長などの要職を歴任した後藤新平（1857～1929）。後藤がつけているのは金製のネクタイ・ピンのようだが、これ以外にもダイヤモンド入りや各種宝石入りのものもあった。

当時のネクタイ・ピンは、現在のジャケットの襟に挿す「ラペルピン」と同形。このピン先をネクタイの結び目の下に挿すことが一般的だった。ピン先は真鍮製のキャッチ（受け金具）をかぶせた。その頃はネクタイをゆるく結んだので結び目がほどけやすかった。

ネクタイ・ピン、カフスポタン

ネクタイ・ピンは洋装の普及とともに、明治三十年代の終りから四十年代には一部のハイカラ趣味の男性が身につけた。身につけたのは主におしゃれな上級者で、名士と呼ばれる各界の知名人のステータスシンボルであった。

大正時代になるとネクタイ・ピンをつける男性は増えた。身につけたのは主におしゃれな上級者で、名士と呼ばれる各界の知名人のステータスシンボルであった。



図 1-10-14

印面彫りサンプル

大正 2 年 1 月『尚美堂新品録』

より

英字組み合わせ文字もあった。

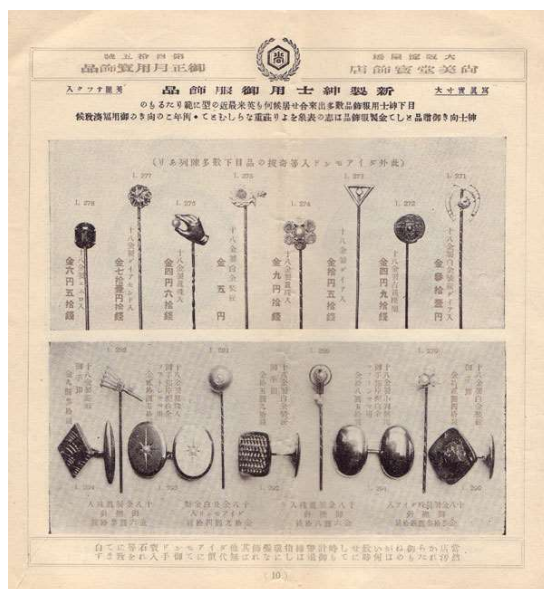


図 1-10-16

ネクタイ・ピンとカフスボタン

大正3年12月『尚美堂時報』より

素材は金製で一部プラチナ製。ネクタイ・ピンはダイヤモンド入り、小粒真珠入りの他、エメラルドが入ったものも紹介されている。カフスボタンは地金ものがほとんどだが小粒真珠が入ったものもある。

留めるための実用的装身具として明治後期から広まり当時は「手釦」^{てぼたん}とも呼ばれた。戦前までのシャツは二重になった袖口（ダブルカフス）が主流だったので、洋装の必需品としてネクタイ・ピン以上に普及し、これで袖口を留める男性は多かった。金製ものの他、安価な金張り製のものなども多数作られた。留め金具とのつなぎには固定式とチェーン式があった。

図 1-10-16 は、尚美堂カタログからのダイヤモンドや真珠のネクタイ・ピンとカフスボタンの図。図 1-10-17 は、明治末期の手頃な価格の銀製金張りのカフスボタン。大正時代にも普及品としてはこのような素材のものが使われていた。



図 1-10-19
真珠のネクタイ・ピン
金
(天賞堂・伊藤廣司氏旧蔵品)



図 1-10-18
ヒスイのネクタイ・ピン
金

の宝石入りのネクタイ・ピンの実物。
 図 1-10-18、図 1-10-19、図 1-10-20 は大正前期から後期頃



図 1-10-17
明治末期の銀製金張りカフスボタン
明治 44 年 4 月 21 日『時事新報』
「ハイカラの新作」とある。



図 1-10-22
彫金の金のカフスボタン
(いが栗)
K18
桂光春作



図 1-10-21
型打の金のカフスボタン
(水仙)
K18
山崎商店(現・田中貴金属ジュ
エリー)の星Sマーク

図 1-10-21、図 1-10-22 は大正前期から後期頃のものと思われる金のカフスボタン。打出し(型打)のものとはタガネによる彫金のものとあり、彫金のカフスボタンには桂光春のような名工も腕を振るった。



図 1-10-20
オパールネクタイ・ピン
金
(天賞堂・伊藤廣司氏旧蔵品)